

群馬県蚕糸振興計画

令和8年3月

群馬県農政部

目 次

1 本県の蚕糸絹業	・・・ 1
(1) 絹産業の歴史	
(2) 世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」	
(3) 次期式年遷宮の「御料生糸」生産地に選定	
(4) 蚕糸業の現状（R6）	
2 策定の考え方	・・・ 3
(1) 趣旨	
(2) 位置付け	
(3) 期間	
(4) 基本目標	
3 蚕糸振興の施策	・・・ 4
取組方向 1 多様な養蚕の担い手確保と定着支援	・・・ 4
取組方向 2 県産優良繭の生産安定	・・・ 6
取組方向 3 製糸業の基盤強化	・・・ 8
取組方向 4 付加価値の高い蚕糸業の創出	・・・ 10
取組方向 5 蚕糸業を支える試験研究	・・・ 12
取組方向 6 蚕糸絹業の交流と情報発信	・・・ 14

1 本県の蚕糸絹業^{けんぎょう}

(1) 絹産業の歴史

絹の歴史は、今から 5000 年以上昔の中国に始まり、日本には紀元前後に養蚕・製糸技術が伝わったとされています。本県では、8 世紀の中頃に新田郡（現在の太田市）から貢納された絹が正倉院に残されていることなどから、この頃には既に絹が特産品として生産されていたと考えられ、18 世紀には繭・生糸の一大産地として大きく発展しました。

その後、1909 年には日本が世界一の生糸輸出国になり、蚕糸絹業は明治から昭和初期にかけて生糸の生産や輸出を通じて、日本の近代化と経済発展に大きく寄与するとともに、地域経済や文化の形成にも重要な役割を果たしてきました。

現在は、海外からの安価な生糸や絹製品の輸入増加、社会構造の変化による絹需要の減少等により、蚕糸絹業の規模は縮小しています。しかし、日本で培われた養蚕・製糸技術は、今日においても世界の絹産業を支える重要な基盤となっています。

(2) 世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」

富岡製糸場など 4 資産^{※1}で構成される「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、高品質な生糸の大量生産を実現した「技術革新」と、世界と日本との間における「技術交流」を主題とした近代の絹産業に関する遺産であり、平成 26 年 6 月に世界遺産に登録されました。

この世界遺産登録を契機として、蚕糸業への関心が高まり、新規参入に関する相談が増加しました。本県では、伝統ある蚕糸業を継承することが世界遺産の文化的価値に厚みを増すこと、蚕種^{さんしゆ}^{※2}製造から絹製品に至るまで、各生産段階が地場産業として根付いていることから、関係機関が一体となって、養蚕担い手の確保・育成対策に取り組んでいます。



富岡製糸場（東置繭所）
画像提供 富岡市



富岡製糸場（繰糸所内部）
画像提供 富岡市

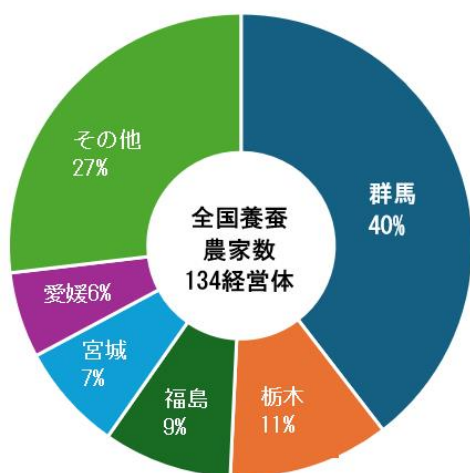
(3) 次期式年遷宮の「御料生糸」生産地に選定

伊勢神宮の式年遷宮は20年に1度行われ、社殿の造替に加えて、御装束や神宝も新調されます。次期式年遷宮において、これら御装束や神宝の材料となる「御料生糸」の生産地として群馬県が選定され、本県の養蚕農家による蚕の飼育が始まりました。

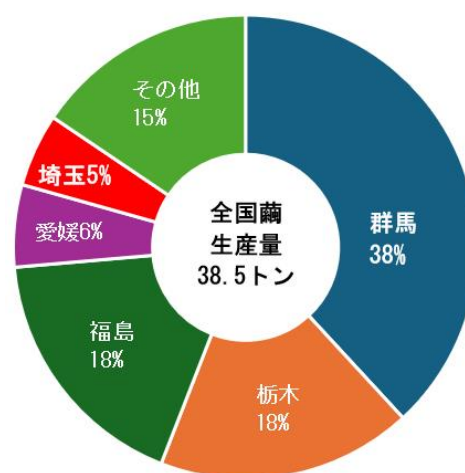
また、令和7年7月には「御料生糸」の繰糸開始にあたり、本県で「生糸繰糸始式」が厳かに執り行われました。

(4) 蚕糸業の現状（R6）

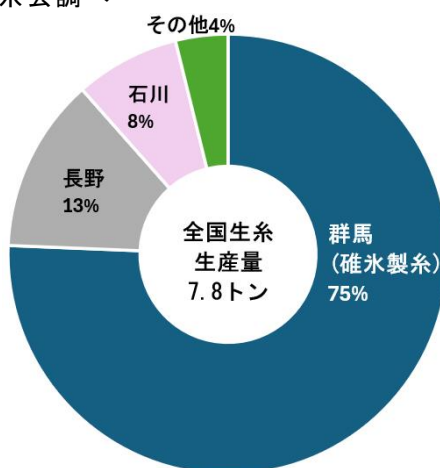
本県は、養蚕農家数、繭生産量、生糸生産量いずれも日本一を誇っています。



全国養蚕農家数（R6）
大日本蚕糸会調べ



全国繭生産量（R6）
大日本蚕糸会調べ



全国生糸生産量（R6）
大日本蚕糸会調べ

※¹ 富岡製糸場（富岡市）、田島弥平旧宅（伊勢崎市）、高山社跡（藤岡市）、荒船風穴（下仁田町）の4件

※² 蚕の卵

2 策定の考え方

(1) 趣旨

日本の近代化に貢献してきた本県の蚕糸業は、世界遺産である「富岡製糸場と絹産業遺産群」を生み出した原点ともいえる、歴史と文化を象徴する重要な産業です。

本県は、養蚕農家数、繭生産量、生糸生産量のいずれにおいても日本一を誇り、都道府県では唯一の研究機関である群馬県蚕糸技術センター（以下「蚕糸技術センター」）が蚕種製造や稚蚕^{ちさん}※¹人工飼料の製造を始めとした、蚕糸業への様々な支援を行っています。

一方で、蚕種製造や稚蚕共同飼育所^{ちさん}※²の減少等により、蚕糸業の基盤は脆弱化しています。このような状況の中、蚕種業、養蚕業、製糸業に関わる県内外の関係者が協力し、その強化を図ることで、将来にわたり日本の蚕糸業を維持・発展させていくことが重要です。

そこで、県では、今後の蚕糸振興の施策や方向性を明確にし、関係者が蚕糸振興に取り組む際の指針となるよう、本計画を策定しました。

(2) 位置付け

本計画は、群馬県の農業分野における最上位計画である「群馬県農業農村振興計画」の蚕糸振興に関する「部門計画」として位置付けるものです。

本県蚕糸業の10年先を見据えて、計画期間における施策の方向性や目標を示す蚕糸振興の基本指針とします。

(3) 期間

令和8年度を初年度とし、令和12年度を目標年度とする5年間とします。

(4) 基本目標

「ぐんま」が支える日本の蚕糸業

本県は、全国繭生産量の約4割、全国生糸生産量の約7割を占めており、日本で最も蚕糸業の盛んな県です。

国内の蚕糸業の基盤が脆弱化する中、本県蚕糸業の維持・発展のため、本県の関係者はもとより、国内の他産地とも連携しながら取組を進めていきます。

※¹ 1齢から5齢までの蚕の成育段階のうち1齢から3齢までの蚕。ちなみに4齢から5齢までは^{ちさん}杜蚕

※² 稚蚕を飼育し、各農家へ出荷しています。群馬県では、富岡市にある小野稚蚕人工飼料育センター1カ所で行われています。

3 蚕糸振興の施策

取組方向1 多様な養蚕の担い手確保と定着支援

〈現状と課題〉

令和6年の養蚕農家数は55経営体^{※1}（前年比4経営体減）であり、5年前と比較して47経営体減少しています。

本県では、平成26年の「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録を契機に養蚕への新規参入に関する相談が増加しました。そこで、平成28年から蚕糸技術センターにおいて技術習得のための「ぐんま養蚕学校」を開講し、新規参入者の育成に取り組んできました。その結果、令和6年までに35経営体が新規参入しました。このうち、現在も養蚕を継続しているのは21経営体で、養蚕農家全体の38%を占めています。

「ぐんま養蚕学校」の開講により、新規参入者が一定数確保できたものの、高齢化や後継者不足による農家数の減少を補いきれていません。また、参入後に廃業した農家もあることから、より多くの新規参入者を確保し、養蚕農家として定着できるよう、取組を強化することが重要です。

今後は、移住者や企業による養蚕参入など、多様な担い手を確保するため、群馬県と就農先の市町村、JA等が連携し、技術習得を柱として、桑園の斡旋、養蚕施設・資材等に対する補助等、新規参入者ごとの課題に対応した支援を経営が軌道に乗るまで継続的に行う必要があります。

年度別養蚕農家数と新規参入者の状況

単位：経営体

年度	H26	H27	H28	H29	H30	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6
県全体の養蚕農家 （繭生産者）数	143	137	125	121	111	102	86	72	62	59	55
新規参入者数 当年計	1	3	5	9	3	2	2	2	3	3	2
新規参入者数 累計	1	4	9	18	21	23	25	27	30	33	35
うち当年の養蚕 農家（繭生産者）	1	4	9	15	19	20	21	19	19	22	21
県全体に 占める割合	1%	3%	7%	12%	17%	20%	24%	26%	31%	37%	38%

〈取組内容〉

- ① 「ぐんま養蚕学校」の研修生の確保に向け、SNS等を活用した情報発信を強化します。
- ② 「ぐんま養蚕学校」では、オンライン研修の導入や経験豊富な養蚕農家による技術支援のメンター制度等、柔軟できめ細かな研修・サポート体制を整えます。
- ③ 資材の購入や桑園造成等に係る経費を補助することで、養蚕への新規参入や規模拡大を支援します。
- ④ 新規参入者に向け、製造中止等により入手が困難となっている養蚕資材のリユースを推進します。



「ぐんま養蚕学校」桑採りの研修



「ぐんま養蚕学校」飼育管理の研修

〈指標〉

目標指標	単位	R6年基準年度	R12年目標年度
養蚕経営体数	経営体	55	55
新規参入者数 (R6年からの累計)	経営体	2	20

※¹ 本計画では農業経営体として、個人や世帯で養蚕を行う農業者に加え、法人化して養蚕を行う農業法人や株式会社等も対象としてカウントしています。

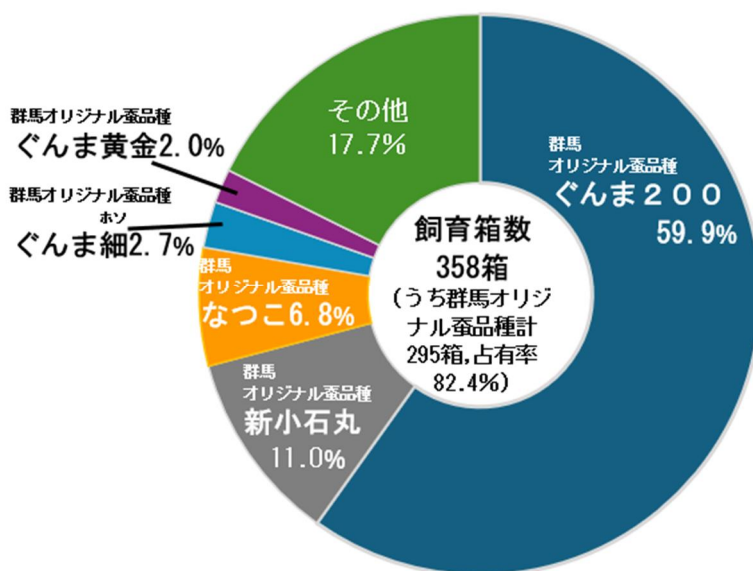
取組方向 2 県産優良繭の生産安定

〈現状と課題〉

令和6年の繭生産量は、高齢化等による養蚕農家の減少に加え、記録的な猛暑による作柄不良や晩秋蚕期^{※1}における蚕病^{※2}の多発により、15.1トン（前年比80.1%）となりました。今後も地球温暖化が進行する可能性は高く、気候変動に対応した対策の強化が必要です。

また、外国産と差別化した付加価値の高い県産優良繭・生糸の生産安定を目的として、蚕糸技術センターでは、糸の太さや生糸の染色性等に特徴のある「群馬オリジナル蚕品種」を育成して蚕種を供給し、これらは県内外の養蚕農家で飼育されています。現在9品種が育成され、令和6年における県内での蚕飼育量の占有率は82.4%となっています。暑さに強い品種が欲しいという養蚕農家からの要望に応えるために育成された「なつこ」は、令和2年から養蚕農家での実用生産が始まりました。令和6年の占有率は6.8%であり、気候変動に対応した蚕品種として、今後の飼育量拡大が期待されています。

なお、養蚕農家の経営安定対策としては、繭の代金（以下「繭代」）について、一般財団法人大日本蚕糸会^{※3}（以下「大日本蚕糸会」）の助成事業を活用した繭代助成が行われています。これに加えて、群馬県では、県と市町村が協調して繭代の上乗せ助成を実施することで、県内の繭生産量の維持を図っています。



蚕の品種別飼育状況（R6）

〈取組内容〉

- ① 猛暑対策として、暑さに強い群馬オリジナル蚕品種「なつこ」の飼育蚕期を、現在の初秋蚕期※¹に加え、夏蚕期、晩秋蚕期へと拡大していきます。
- ② 養蚕農家に対して、清潔な環境で飼育する防疫管理の徹底と薬剤による蚕病防除技術を推進します。
- ③ 温暖化に伴い、桑の生育期間が延長していることから、初冬蚕期での飼育を推進し、繭生産量の増加を図ります。
- ④ 繭価格が生産費を下回る状況が続いているため、県等による繭代助成を通じて養蚕農家の経営を支援し、繭生産量の増加を図ります。



群馬オリジナル蚕品種「なつこ」



D-DAC 消石灰液による蚕室消毒

〈指標〉

目標指標	単位	R 6 年基準年度	R 12 年目標年度
県産繭生産量	トン	15.1	22
群馬オリジナル蚕品種「なつこ」占有率	%	6.8	25
【蚕糸技術センター】 生産技術指導回数	回	62	100

※¹ 蚕を飼育する時期について、群馬県では早い順に春蚕期→夏蚕期→初秋蚕期→晩秋蚕期→初冬（晩々秋）蚕期に区分されます。

※² 蚕に起こる疾病の総称。伝染性がある感染症は、大量に蚕が死滅する恐れがあります。

※³ 前身は明治 25 年創立の大日本蠶絲會であり、変遷を経て平成 26 年に一般財団法人へ移行登記されました。蚕糸絹に関する科学技術の振興と蚕糸・絹業の改良発達を図るとともに、蚕糸絹に関する社会文化の向上発展に寄与することを目的として、各種事業を実施しています。

取組方向3 製糸業の基盤強化

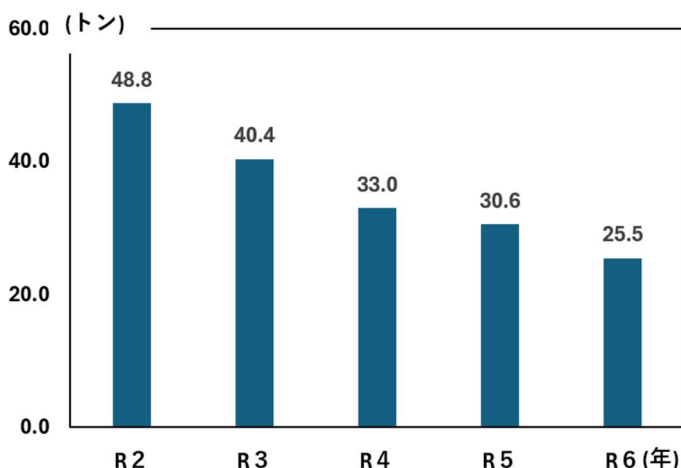
〈現状と課題〉

本県の製糸工場は、現在、碓氷製糸株式会社（以下「碓氷製糸」）1工場のみとなっています。碓氷製糸は昭和34年の創業以来、碓氷製糸農業協同組合として製糸専門の事業を行ってきましたが、平成29年5月、本県蚕糸業の維持継承を図るとともに全国の繭を取り扱える組織とするため、株式会社へ組織変更を行いました。現在は本県を始め9県から繭を収納し、全国の生糸生産量の75%を占めるなど、我が国の蚕糸業を支える基幹工場となっています。

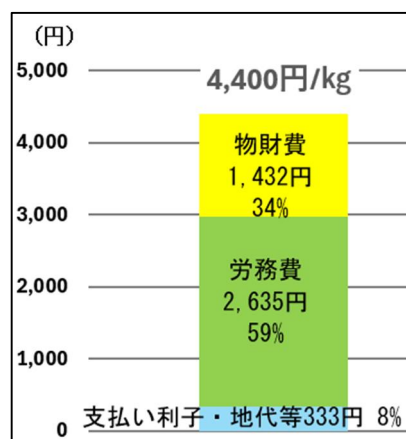
碓氷製糸の令和6年の繭収納量は、養蚕農家の繭生産量の減少により、25.5トン（前年比83%）となりました。繭収納量を安定的に確保するためには、繭生産量の減少を食い止めて、増加へ転じさせる必要があります。生産量減少の一因として、養蚕農家の繭生産費が1kgあたり4,400円であるのに対し、上繭^{※1}買取価格が1kgあたり2,665円^{※2}（令和6年提携グループ^{※3}の加重平均、大日本蚕糸会調べ）と下回っていることが挙げられます。このため、碓氷製糸においても繭生産費を上回る繭価格で養蚕農家と取引できるよう、生糸の販売強化を図るとともに、新商品の開発や多様な絹製品の販売促進に取り組んでいく必要があります。

また、碓氷製糸の施設、機械は老朽化が進んでおり、工場の安定的な稼働にも影響を及ぼす可能性があります。令和5年度には、製糸工場光熱費高騰対策支援事業による助成を活用し、電力費の高騰対策として、高圧電源装置等の更新・改修を行いました。その他の施設や機械についても更新・改修が必要な状況です。

さらに、碓氷製糸では、生糸製造管理や養蚕指導等の業務を担う技術者の高齢化が進んでおり、製糸業を将来にわたり維持していくには、技術の継承を担う人材の確保・育成が課題となっています。



碓氷製糸繭収納量の推移



上繭1kgあたりの生産費(R6)

大日本蚕糸会試算

〈取組内容〉

- ① 高品質な生糸生産を継続していくため、各種助成事業を活用した計画的な施設整備を支援します。
- ② 生産コストが適切に反映された繭価格と生糸価格の実現に向け、販売強化の取組を支援します。
- ③ 絹製品の企画・販売や観光蚕糸業の推進を含め、多角的な経営展開が図れるように支援します。
- ④ 製糸技術者の育成については、製糸工場における技術継承を基本とし、安中市や大日本蚕糸会蚕糸科学技術研究所^{※4}（以下「蚕糸科学技術研究所」）等の関係機関と連携して支援します。



碓氷製糸の生糸製造



碓氷製糸の生糸

〈指標〉

目標指標	単位	R 6年基準年度	R12年目標年度
碓氷製糸の繭収納量	トン	25.5	30

※1 製糸原料として合格した繭

※2 群馬県では、上繭の買取価格に加え、県、市町村による繭代補助を実施しています。

※3 国産生糸の希少性を生かし、これに絹業側の染・織・デザインの力を加えて、品質の高い差別化された絹製品を生産します。それによって実現された高い価格を各生産段階に還元することを目的として、農林水産省等の支援により、蚕糸業（養蚕農家、製糸工場）と絹業（織物等）が参加し、結成されたグループ

※4 蚕糸絹分野の研究及び技術開発を推進するとともに、蚕種製造、繭質・生糸検査、養蚕農家に対する技術指導等の業務を実施しています。

取組方向 4 付加価値の高い蚕糸業の創出

〈現状と課題〉

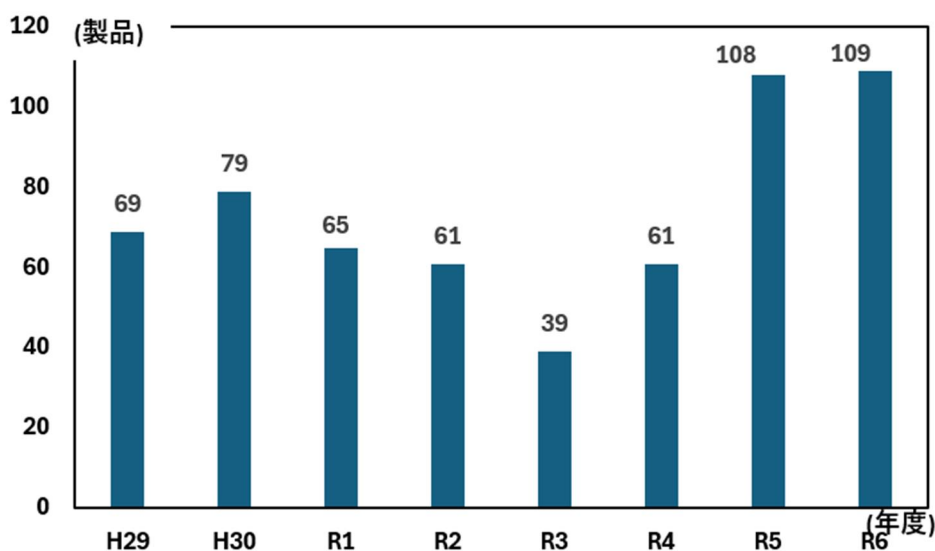
国産の生糸や絹製品の販売は、安価な外国産の輸入により厳しい状況が続いており、令和6年の国内絹需要に占める国産生糸のシェアは0.13%にとどまっています。このため、本県では外国産等との差別化を図るため、群馬オリジナル蚕品種を養蚕農家へ供給するとともに、平成11年度から、これらを原料とした生糸・絹製品を「ぐんまシルク」として認定し、ブランド化や生産・販売の拡大を推進しています。令和6年度は16企業の109製品を認定し、各企業では「ぐんまシルク」ロゴマークのシールを商品に貼付するなどして、絹製品の販売促進に活用されています。

また、蚕糸技術センターでは、付加価値を高めるため、GMカイコ^{※1}を活用した高機能シルク（高染色性シルク、蛍光シルク等）や有用物質（検査薬原料、化粧品原料等）の生産について、国や民間企業と共同研究を進めています。なお、GMカイコの飼育については、カルタヘナ法^{※2}に基づき国の承認が必要です。

国内絹需要と生糸生産量の状況

年	H2	H7	H12	H17	H22	H27	R2	R3	R4	R5	R6
国内需要量(トン)【A】	16,620	21,960	14,820	14,580	9,960	9,563	6,612	6,359	6,360	6,060	6,120
国内生糸生産量(トン)【B】	5,622	3,146	559	150	53	23	12	10	10	9	8
国内生糸のシェア【B/A】	33.83%	14.33%	3.77%	1.03%	0.53%	0.24%	0.18%	0.16%	0.16%	0.15%	0.13%

大日本蚕糸会調べ



「ぐんまシルク」認定製品数の推移

〈取組内容〉

- ① 「ぐんまシルク」の認定製品の増加を図るとともに、これらのブランド化やPRを支援し、県産シルクの需要喚起につなげます。
- ② 生糸に限らず、新たな用途開発等、新規連携企業の取組について、共同研究を通じて支援します。
- ③ GMカイコの生産技術を活用した企業の新規事業創出や新製品開発を支援します。



「ぐんまシルク」新ロゴマーク
(令和7年10月～)



GMカイコ (GFP^{※3}ぐんま200) の繭

〈指標〉

目標指標	単位	R6年基準年度	R12年目標年度
ぐんまシルク認定製品	製品数	109	120
【蚕糸技術センター】 共同研究での新規連携企業 (R8年からの累計)	企業数	2	5

※1 遺伝子組換えカイコのこと。英語では「Genetically Modified Silkworms」、その頭文字を取り「GMカイコ」

※2 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物多様性の確保に関する法律のこと。この法律では、遺伝子組換え生物等の使用による、生物の多様性へ悪影響が及ぶことを防ぐため、規制措置等を講じています。

※3 緑色の蛍光タンパク質のこと。英語で「Green Fluorescent Protein」、その頭文字を取り「GFP」

取組方向5 蚕糸業を支える試験研究

〈現状と課題〉

蚕糸技術センターは、都道府県の公設機関として唯一の蚕糸専門の試験研究機関であり、繭の増産や高付加価値化に資する技術を中心に課題化し、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、蚕糸科学技術研究所等の研究機関や民間企業とも連携しながら、研究に取り組んでいます。特に令和6年度からは、新たな課題として有機桑園の造成を進め、有機養蚕技術体系の確立を目指した研究も開始しました。今後、蚕糸業の振興に向け、養蚕の生産現場や製糸・生糸の実需者のニーズを重視した研究を行っていく必要があります。

このほか、蚕糸技術センターでは、群馬オリジナル蚕品種の蚕種（卵）製造や稚蚕人工飼料「くわのはな^{※1}」の製造・供給、「ぐんま養蚕学校」による担い手の育成、養蚕農家への技術指導、稚蚕共同飼育所への飼育指導等、蚕糸業に不可欠な多岐にわたる業務にも取り組んでいます。

特に、主要業務である群馬オリジナル蚕品種などの蚕種製造において、安定的に蚕種を供給するためには、気象条件に左右されず原蚕種を適切に飼育できる施設の整備が不可欠です。しかし、近年の猛暑など厳しさを増す気象条件に加え、原蚕種^{※2}を飼育する蚕室^{※3}の老朽化、さらには温度制御能力や収容能力の不足が課題となっています。

また、人工飼料で3齢までの稚蚕を育てる稚蚕共同飼育所では、品種ごとの分離管理ができず、複数品種を同時に扱うと作業が煩雑化し、成育のばらつきが生じる恐れがあります。このため、品種ごとの飼育に対応できる飼育体系の確立が求められています。

さらに、4齢以降も人工飼料で飼育する「全齢人工飼料育^{※4}」は、労力削減や飼育期間の拡大が期待される一方、繭生産量を向上させるためには、コスト低減や飼育技術の確立など、克服すべき課題が残されています。こうした人工飼料育に関する試験研究を継続的に行うためにも、専用の研究施設の整備が必要です。



蚕種製造（蛹の雌雄鑑別）



稚蚕人工飼料「くわのはな」

〈取組内容〉

- ① 蚕糸業の振興を図るとともに、新たな養蚕経営が展開できるよう、他の研究機関や民間企業等と連携した新技術の研究開発を行います。
- ② 有機JASに沿った桑園管理や有機繭生産に適合した防除方法の確立等、有機養蚕技術体系の構築を図ります。
- ③ 蚕種製造を行う各種施設の整備を進めるとともに、蚕種製造における人工飼料育の導入や稚蚕人工飼料育の技術再構築を図り、蚕糸業の土台を強化します。



低コスト人工飼料による全齢人工飼料育



有機桑園の造成

〈指標〉

目標指標	単位	R6年基準年度	R12年目標年度
【蚕糸技術センター】 ぐんま農業新技術 ^{※5} の件数 (R8年からの累計)	件	1	5

※1群馬県稚蚕人工飼料センターで蚕の餌として、桑や大豆粉末等で製造する人工飼料の名称。稚蚕（1齢から3齢まで）の飼育に人工飼料を利用することで、養蚕農家の労力削減に加え（飼料の品質が安定しているため）繭の作柄の向上が期待できます。

※2農家で飼育する蚕の卵を作るための親の蚕

※3蚕を飼う部屋

※4全齢（1齢から5齢まで）において、人工飼料を使用した蚕の飼育

※5群馬県の試験研究機関が開発した新技術のうち、生産性や品質の向上等の優れた改善効果が認められ、生産者等に直ちに技術移転が可能であると認められた技術

取組方向 6 蚕糸絹業の交流と情報発信

〈現状と課題〉

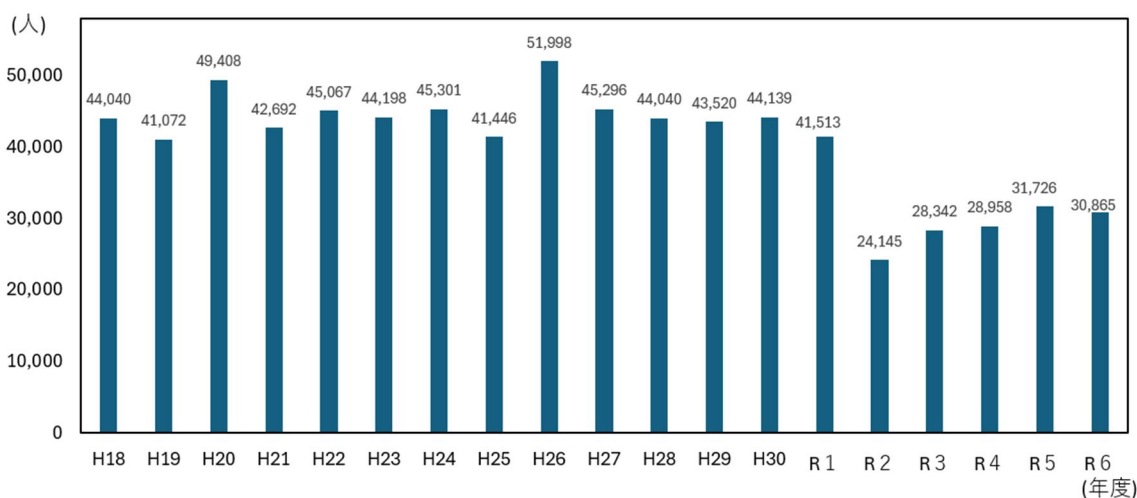
群馬県立日本絹の里（以下「日本絹の里」）は、平成10年4月、蚕糸と絹に関する県民への理解を深めるとともに、蚕糸絹業関係者の交流や蚕糸業振興の拠点、情報発信の場として開館しました。平成18年4月からは指定管理者による管理運営が行われています。

館内では、世界遺産「富岡製糸場と絹遺産群」や繭・生糸の生産等の蚕糸絹業に関する資料等を紹介する「常設展示」、蚕糸技術や染織作家等の多様なテーマを設定した「企画展示」、蚕糸絹業に関する「講演会」、そして絹の需要拡大を図るための「イベント」等を開催しています。さらに、繭クラフトの制作や蚕の飼育等の「体験学習」も多数実施しています。これらの取組を通じて、子どもから大人まで幅広い世代を対象に、本県の伝統ある蚕糸絹業の足跡や天然繊維である絹の魅力への理解促進を図るとともに、絹文化と蚕糸技術を未来へ継承することの重要性を発信しています。

日本絹の里の施設利用者数は、新型コロナウイルスの感染症対策の一環として実施した臨時休館等の影響により、令和元年度の41,513人から令和2年度には24,145人へと減少しました。その後も利用者数は十分に回復しておらず、目標施設利用者数47,000人に対して、令和6年度は30,865人とどまっています。施設利用者数の増加に向けて、広報活動の強化や新たな集客につながる取組を進めることが重要です。

また、伊勢神宮で令和15年に予定されている第63回神宮式年遷宮において、養蚕農家数・繭生産量・生糸生産量のいずれも日本一である群馬県が「御料生糸」の生産地として選定されたことは、大変名誉であり、極めて意義深い出来事です。

これを契機として、養蚕や製糸への関心がこれまで以上に高まることが期待されます。こうした状況を踏まえ、関係者が一丸となり、絹文化の継承や国産シルクの認知向上に取り組み、持続可能な蚕糸絹業の確立を目指していくことが求められています。



日本絹の里年間施設利用者数の推移

〈取組内容〉

- ① 絹文化の継承と国産シルク振興のため、関係者との連携強化とメディア活用による認知度向上・情報発信力の強化を図ります。
- ② 蚕糸絹業の情報発信の拠点である日本絹の里について、魅力ある展示の充実や、SNS等の工夫を凝らしたPR活動を行い、施設利用者の増加を図ります。
- ③ 本県の蚕糸絹業が持つ歴史や魅力を未来へ継承するため、日本絹の里においては、特に次世代を担う小学生を対象として、学校教育を通じた理解促進と利用拡大の取組を強化します。
- ④ 日本絹の里シルクショップ内に、「ぐんまシルク認定製品」を集めたコーナーを設置し、県産シルク商品のPRや販売促進を行います。



日本絹の里 外観



企画展示室 糸かけアート
(日本絹の里)



小学生の団体
(日本絹の里)



シルクショップ
(日本絹の里)

〈指標〉

目標指標	単位	R 6 年基準年度	R12 年目標年度
日本絹の里年間施設利用者数	人	30,865	47,000

群馬県蚕糸振興計画

問い合わせ先

- ・群馬県農政部蚕糸特産課
TEL 027-226-3092（蚕糸特産係）
- ・群馬県蚕糸技術センター
TEL 027-251-5145